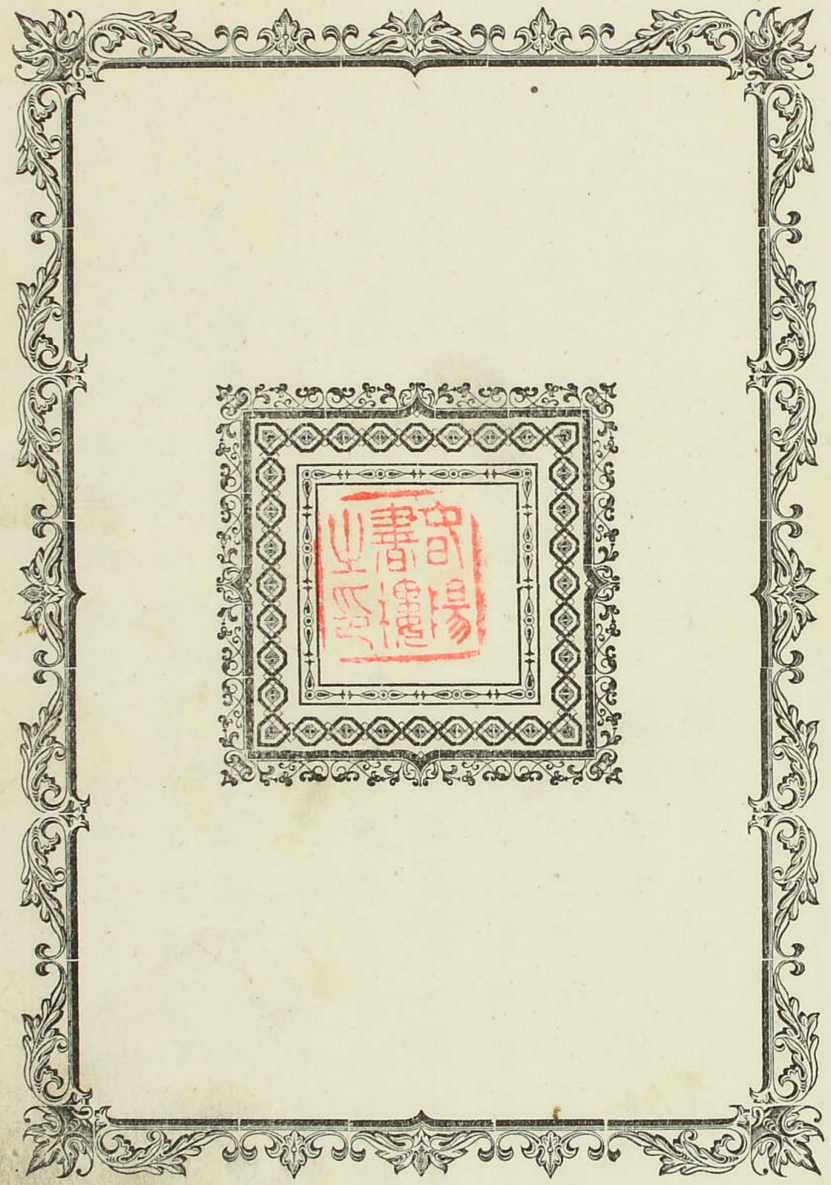
纂評新體詩選

竹内隆信編

東京春陽堂藏版

肆書泉
日本橋通四丁目五番地
SOUSEN



序

前年余甞。篇二新体詩歌者。付二之剞劂。一以公レ世焉。而此書何幸。猥蒙二大方之愛翫。門外填咽。購客常作レ山焉。於レ此乎所在書肆。再刊三梓。以應二江湖百万之需。一殆有二洛陽紙價爲貴之想一矣。庚申之秋。余遊二峽州。一以レ事終留居焉。從レ此以来。山阻水涯。索居無聊。與二時事一日疎。而適會四書肆飛レ書来。見求二又別新体詩之編纂。一是余又所三以有二此編一也。一日有レ客問レ余曰。新体詩歌。則五集皆不レ見三其可二間然一焉。至二此編一則雖二優麗艶美可レ愛。顧無三乃傷二諸大家先生之道德一乎。余曰否々。君亦爲二此皮相之見解一乎。此編則一皆是。美人香草。忠臣義子之寓言也。只以三其文

辭之優柔艷麗。而不嚴正爽快。直作淫褻卑猥之觀過矣。先輩嘗論。曰韓昌黎。諫迎佛骨表。風骨錚然。而紅裙綠酒之詩。贈炙騷壇。歐陽廬陵。與高司諫書。稜角峭厲。而江南柳詞。傳播章臺。可見大家莫所不有之概焉。然則。余今從諸大家先生詩歌中。採抄而作此編。是不啻不傷諸大家先生之道德。亦示莫所不有之概者。非哉歟。客笑而去。則錄此言。以爲序云。

明治十九年八月上浣

海南　竹内隆信撰

凡例

一此編ニ蒐集スル詩歌ハ西洋ノPoetryニ模擬シテ作爲セシ者ナレハ篇々皆PhraseトStanzaトヲ分テリ

一編中揭クル所ノ詩歌ハ得ルニ隨ヒ之ヲ載錄ス敢テ前後ヲ以テ其優劣ヲ判スルニアラサルナリ

一詩歌ノ首メニ序言ヲ附シ尾ニ評ヲ加ヘタルモノハ編者ノ用意讀者ヲシテ幾分ノ注意ヲ促サント欲スルノ老婆心ニシテ固ヨリ漢儒者流ノ漫然詩文ヲ評スルモノト大ニ異ナレリ讀者幸ニ之ヲ諒セヨ

一此編ニ載スル所ノ者ハ其體皆七五ナリ故ニ流麗圓滑ニシテ以テ管弦ヲ調スヘシ我邦古來ノ長歌ト全ク其趣キヲ異ニシ新タニ壇宇ヲ開クモノ是レ新體ノ名ノ因テ起ル所以ナリ

明治十九年八月一日

編者識

會津白狐隊十六勇士飯盛山ニ自刄ス

目次

○醒聽氣
○萊因河戍兵歌
○武藏野歌
○端舟競漕歌
○學の歌
○王政復古歌
○記正行母教訓詞
○薩摩琵琶歌
○拜湊川楠公廟
○桶峽懷古
○觀會津白虎隊自刃之圖有感
○譯拔刀隊歌

○譯二波蘭滅亡之歌一
○不夜城の詞
○戲ふ娼婦に寄せ
○越路の白雪
○戲ふ美人ふ送る
○賽二美人淚一
○待レ春詞
○初冬山居卧病
○耶蘇辨惑一節
○贈二學友一
以上二十二篇

新體詩選

毛野　首藤次郎校閲
南紀　竹内隆信纂輯

纂評

藤田幹明曰
警拔雄偉漢
癖者當破肝
膽

○醒二睡氣一

我か日の本の學問ハ　支那の盛の其頃ふ
彼より得たる形の儘　創めて立つる說もなく
孔孟主義の仁義說　長く心に浸深し
惺窩　羅山ふ石丈山　中江藤樹ふ物徂徠
仁齋　艮齋　一齋と　白石　闇齋　服元喬
其名ハ非常に高けきど　自ら始めし學ならぎ

蜻氏曰說得切當是實巽軒井上先生所謂支那亦不乏拾學而繼起無其人故遂不大興迫至近世究真理者洛々晨星百不一二見是以人智有退而無進者也噫

述へて作らぬ方を守り一ゝ偏よる道義學修むる事の外いかしらぬ其の本山の支那とても說を始めゝ人々いに孔子老子ゝ揚墨子續ひて出る孟莊韓一時盛を極めしも昔しを慕う卑屈の氣腦を充せしものからふ周邵張陸程朱輩學者を學者ゐ違はねど人の耳目を新ゝしく智識を增の少おきい學の道の日々ふ進む所以い他ゐあらぬ古人の說を墨守せぬ仮令古聖の教として道理ゝ違ふとありと認むる時い充分ふ正さゐや置のぬ剛のものの種々の學者の多き中

蜻氏曰此種詩在今時和者誰居所時無英雄使豎子成名也

藤田幹明曰西人冨敢爲之氣象誠可羨

瑣克刺底ふ布拉多亞里私特德垤加爾多韓圖歇傑爾茱弗洛克倍根彌兒牛董降て達兒尹蘇邊薩伊太利國の加里列阿ゝ亞米利加國の富蘭克氏時ゝ前後いあるなきど各々自ら說を立て或い機械を發明し古人の狹き智の垣ゝ縛めらきぬ獨立し日々ゝ新さゝ又日々ゝ新たゐ進む諸學術今や是等の人々の生れ出たる歐洲い世界の中の開化國優るい勝ちて劣れるい敗きふや成らぬ原則ゝ違いぬ威力を万國ゝ煙せるそ盛なる我神州も今日い

海南曰固然々々讀者幸猛省焉

神風頼みて安閑と　學而第一朱熹章句
奴鳴て暮す時おらぢ　早く發明創造の
智力を附て歐洲の　開化の人の仲ケ間入
せねば成らざる時ぞ　睡氣醒せよ生書生
醉ひ潰れたる漢癖者

竹内海南曰。改進者人世之固然。宜下期二望將
来一而勇往。上追二惜既往一而不レ可二退歩一也。予嘗。聞二
之西哲一。曰大凡天下之事。皆依二真理一。而不レ可レ
不レ判レ之。縱令敬二重尊三崇古人一。有下其所レ說。及其
所レ論。而錯謬或可二厭惡一者上安有上黙二過之一々理上
哉。況又安有下主二張之一々理上哉。論至レ此。人或曰

受レ道之師。於レ情誠有下不レ忍二弁難論駁一者上故
輙狂隱二容之一。噫如二此言一。是決非レ所四以敬二重尊
崇三古人一也。寧蔑二如真理一之罪人而已。宜哉言
乎。人々有二此精神一。而後文運之進捗初可レ圖
也。可レ觀。泰西諸國碩學鴻儒。陸續輩出。駸々
乎文運日進焉。舉レ眼而回二顧東洋一。孔孟老莊。
其他二三子以降。亦不レ有下爲二新論新說一者上也。
適有レ之即一駁却レ之曰。是異端已。是邪說已。
獨株二守陳說腐論一。而以自安焉。甚矣哉。之二獨
立勇往之氣象一乎。予嘗有レ慨レ此。私心自誓曰。
與レ予以二教育一。予將レ一二新天下之耳目一焉。當時

氣岸頗鋭。以爲功名垂手而可収矣。然而前跋後疐。胡狼不啻。所志未能施万一。而恨同肥三千万中。又嘗與予無同此感者焉。及讀此篇。初知天下與予同感慨者。其人誠不尠也。予將他日訪作者。以講一新天下之耳目之策也。讀者以勿爲一場之空談。

○萊因河戍兵歌

萊因や萊因や萊因河　流を戍るは誰なりや
流を戍るは誰なるや　左様云ふ声は雷の
轟く如き計りまて　さかまく浪も鳴る金鼓も
唯趣を添ふるのみ　國の防禦は堅固なり

海南曰豪壯之詞雄健之筆非此不足以振起兵勢

蜻民曰碎破精鋭無比之佛兵於一擊下者未必不原此國歌之賜

海南曰讀去自動人

國の防禦は堅固なり　國民戍れり萊因の河と
國民戍れり萊因の河を　國民戍れり萊因の河
戍兵億万數なきも　胸は真心唯一つ
敵こそ来れと待ちけく　邊塞堅く備へたり
國の防禦は堅固なり　國の防禦は堅固なり
國民戍れり萊因の河を　國民戍れり萊因の河を
國の矢玉と士卒の呼吸の　竭ぬ其間は一人も
敵を河邊に寄すへきや　國の防禦は堅固なり
國の防禦は堅固なり　國民戍れり萊因の河を

國民戍れり萊因の河を

響く叫ひも流るゝ河も　共ゝ應して絶えぬ日の
光り煙く國の旗　飽まで流を守るべし
國の防禦ゝ堅固なり　國の防禦ゝ堅固なり
國民戍れり萊因の河を　國民戍れり萊因の河を」

靖氏曰讀之一過紙上錚々有声宜矣星羅万國軍歌中推以爲第一

首藤靖氏曰。兵有三種。曰徵兵。曰民兵。曰義勇兵。是也。國至有義勇兵。可謂盛運茲極矣。如歐米諸強國。酷有類之者。予嘗閲各國常備兵之數。曰露。曰佛。曰墺。曰獨。曰英。其兵各數十万。可謂夥矣。而當其相戰。彼所謂義勇

兵者。爭起而赴之。往々至百万或二百万之多云。噫又盛矣。而諸國各有軍歌。當用兵之時。歌以鼓士氣。名曰國歌焉。國歌中有六大名歌。此編即六大名歌中。其尤傑出者也。宜哉。詞句雄壯。筆力勁健。殆使人勇氣勃々溢胸間。拔劍斬地大呼而立。

○武藏野歌

日本武の御稜威もて　ことむけませし吾妻路の
中ゝも廣き武藏野ゝ　見渡を限り八千草の
野ゝも岡ゝも生茂り　唯見るものゝ衣ゑ手の
常陸ゝ志るき筑羽根か　浪打寄る駿河野の

之狀寫出極精妙猶覺波濤皆岸凄風柳野

海南曰凄寥無限

富士の高根の外ぞおき　唯聞くものゝ高繩の
岸邊ゝ騷ぐ白波の　薄壓しおみ秋風の
吹すさみぬる音おらん　八千艸別けて差出る
月ゝ艸野ゝ又隱れ　隅田河原ゝ群れ眠る
鷗鷺かを舟もおく　霜の夕へに餌とあさる
狐の声ゝすさましく　吾妻夷の住おきる
屋ゝ立つ烟微かなり　あな物淋し武藏野や
あな物悽し武藏野や　青海原と變るおり
桑の園生も小山田も　明日の淵とゝ遷るおり
飛鳥の川の今日の瀬も　三百ゝ餘れる國つ守

海南曰鳴鷄吹狗烟火万里大都盛況畫出酷工絶

幹明曰太平之象宛然在目

率ひまつろゝせんとそも　大政所開きたり
國つ守らん事おゝせ　築き建たる此の大城
檜ゝ雲の上ゝよせ　池ゝ千尋の底深き
城の廻ゝ筧伏せ　多摩の川水此ゝ引き
政治とること三百よとせ　波より音おふ者もおき
高繩の里も人ぞ馳せ　隅田河原ゝ声高き
絲のしらべの音ゝたゝせ　鷗ゝ眠る暇ぞおき
あな人繁し武藏野や　あな家多し武藏野や
桑の園生も小山田も　青海原と變るなり
飛鳥の川の今日の瀬も　明日の淵とゝ遷るなり

蜻氏曰誰知荒漠之野一變而開幕府再變而建帝都而偶然終至此古人桑蒼之嘆誠不欺吾也

立花梯村曰自政体變化

江戸の大臣か政事　朝廷ゑ還し奉り
始めて茲ゑ磯の上　古き昔に立歸り
江戸の大城と稱へしい　東の京とあらたまり
大御輦を此ゑ駐め　大御親ら内日刺を
赤坂の宮ゑまゑまして　天の下をぞ知しめを
百の司い大内ゑ　麓を竝べ軒絶ゑぞ
國内の恵み深くして　外の交のいと厚き
西の國より傳へきし　學い年に進み行き
書刷る業のさわやをく　心の智り日ゑ開き
空ゑ電の信をかけ　陸ゑ鐵の道を引き
街ゑ石の屋と築き　往ちふ車の音響き

至學術技藝其他凡百新輸入元々本々無不備舉全將取以充東京府之治革史

海南曰立花君之評先得余心

又曰輕妙無限神韻

海ゑい絶ゑす百八十の　火輪帆船の緒を繋ぎ
八洲開けし始より　年い三千年の秋を過ぎ
御代い百代の上なゑど　かく開けたる御代ゑ無き
懷ゑつゞゝる折ちゑ　伊勢の方より朝まだき
京を差ゑて白鳥の　飛渡ゑきて空高き
梢ゑとまりをゝ、暫し　訝る如く笑む如き
様こそゆゑの志吾出で、　問むんとをれば跡ゑ無き
あな變りたり武藏野や　何を遷りたり武藏野や

反歌

百とせ千とせ經ん後い又いゑのゑらん知る人ぞなき

井上巽軒曰。無限感慨。觸物乃發。蓋是壯士

之常。又曰。押韻自在。絶無窘澁之處。感佩推服

○端舟競漕歌

左の歌は明治十有九年四月四日帝國大學生徒端舟競漕の時豫備門教諭中川重麗氏が談會の盛大なるを祝ひて歌はれたる者なり、

比耳西亞(ベルシヤ)の王の驚死し　オリムピヤの遊戯にも
愧ぢざらましと競ひたり　冠る譽の桂をば
人みどらをなとらまじと　漕ぎ出す舟は大空を
翼ひろげて翔りもく　大鵬とこそみへまけき
學びの淵よ向ふ身は　涙あらくとも何れその

蜻氏曰有爲之士固不可無此精神也

梯村曰有用的之文字讀者幸漫然觀過了以爲平凡無味

心ひとつみ耐忍の　艦をおし切て進むべし
彼の比斯馬克(ビスマーク)何人ぞ　彼のホルトケ何人ぞ
青衿たりし其時は　来因の川ゐ競漕の
遊戯をなしゝ人ぞかし　今は世界ゐ其名をば
知らぬものゐ死英雄ぞ　彼も人ゐり我も人
學びの淵ゐ向ふ身は　涙あらくとも何のその
心ひとつよ耐忍の　艦をおし切て進むべし
宇治よりあらで隅田川　馬にはあらでバツテーラ
先と爭ふ池月が　いざや手並を見せむぞと
相圖にそれと漕ぎ出す　三四五艘の舟と舟
おくまを取て笑はるな　のねてはるびはしめてけり

海南曰鎖々人言何足顧

學びの淵に向ふ身は　浪あらくとも何のその
心ひとつに耐忍の　艪をおし切て進むべし
退くことを知らざるを　猪武者と誰がいひし
猪といはゞがまた鹿と　いはるゝ迄ても厭はじな
我は九郎の真似をせむ　口喧ましき梶原よ
我は逆艪と何かせむ　進みさへすりや勝つものを
學びの淵に向ふ身は　浪あらくとも何のその
心ひとつに耐忍の　艪ばおし切て進むべし

首藤蜻氏曰。慨然可以發勉勵之志。惕然可以警怠惰之情。真有益乎世道人心之文字。

又曰所耳目之聞見一無非勸學之心。嗚呼。

蜻氏曰劒不可不利人不可不智劒不利劒之用廢矣人不智人

如先生者真可謂不恥教官之任矣。敬服々々。

○學の歌

外山先生拔刀隊の歌に擬し學びの歌を作る然れども淺學陋識其語の鄙野其意の寂寞素より西施の顰に傚ふて其醜を晒すのみ唯だ教育を重んずる今日記者請ふ幸ひに死馬骨を捨てずして之を餘白に填め以て千里の馬を待たんことを

學べや學べや皆學べ　人と生れし上からは
學びの道を忘るゝな　萬の物を支配する
人は天地の司なり　怠る勿れ怠るな

之用廢矣而磨智不可不由學人其可不學哉以万物之靈自任人類而漫然不能有爲醉生夢死了而寧不恥心乎

學べや學べや皆學べ　我ま授ゥる靈魂ま
貴賤賢愚の別ハおし　只怠らぞ學びおむ
國の寶とおりぬべし　怠る勿れ怠るお
學べや學べや皆學べ　實理を究め實學を
浮きさる業を爲を勿れ　我身一人の爲おらを
國の利益を圖るべし　怠る勿れ怠るお
思へや思へや能く思へ　人の智識ハ增をものハ
學びの道より外ゐおし　智識を得れば求めぞも

海南曰僕又同感

富貴名譽ハ来るべし　怠るおかを怠るお
思へや思へや能く思へ　治る御代に生れ来て
學びの道ゐ暗々れむ　我身を光らす事もなし
國ハ益をる事もなし　怠る勿を怠るお」

靖民曰讀朱子勸學詩愛之。而苦其難解焉。如此編則不然。一讀可以直得解之。而考之則味不窮。筆墨妙絶。

○王政復古の歌

王政復古のそのゝを　おもへば凄し慶應の
三歳の冬の十二月　九日の日を初めゐて

粧錢兌曰吾友靖民首藤君既評論之而盡矣吾又

何吉雖然觀物之情得無異哉蜻氏子獨評其意而不評文吾今反之而欲專評其文也其筆墨之錯綜波瀾之横溢如万馬歸營金鼓並作使殆人不能端睨

又曰縱横馳騁指使自在如淮陰放兵而戰

都の空またちゝへる　春の光りもぬばたまの
世いかりこもと亂れつゝ　あやめもまかぬをみぞめの
鞍馬まゝ響く関の声　鎧の袖まのゞやくも
星の位も三臺の　影うをれやくさしくしの
曉知暗き鳥羽伏見　大内山の山風まゝ
錦の御旗飜がへし　大將軍のいでましゐ
勇氣いやまをますらとが　軍さよばゐも雷と
轟きまたる修羅の道　斬りつ斬れつ阿毘叫喚
血鹽ゐ染る紅葉ばの　赤き心をとりどりまゝ
什れ重ゐる屍は　敵ゝ身方か彼ゝ誰き
踏しだきやく戰場の　習ひ常ゐき露の身と

又曰如蜻氏子者齡雖少未及知之耳至如吾親踏此境來者讀之而寧無感舊之情哉

驍を劒のつゝの間も　君を忘れぬ武夫の
道の果てこそ適きなれ　天地もうごく震動まゝ
炎さかまく淀の城　覆へる雲の忽ゐ
煙のをへのがげろふも　消て治る君ゞ代の
のどけき春にうちまとゐ　昔し語りと過し世を
語りつゝ酌む盃ゐ　老たる影もの つ見ゆる
この字たけこそ樂しけれ

蜻氏曰。居ㇾ治不ㇾ忘ㇾ亂。鑑ㇾ古以戒ㇾ今。憂國之士固不ㇾ可ㇾ不ㇾ如ㇾ此也。作者當ニ昇平之今日一。遠溯ニ既往一。細說ニ慶應年間劒電彈雨之慘狀一。至ㇾ尾妖氛一掃赫日中ㇾ天。四海皞々民仍鼓腹。或

花間擁二美人一而恨二春日之短一。或月下弄二管弦一而不レ知二秋夜之長一。飽食暖衣高枕安卧之狀寫来。專頌二帝德之弘大一。而所謂居レ治不レ忘レ亂。鑑レ古以戒レ今之意。宛然溢二言外一。嗚呼當二今日一先二天下之憂一而憂。後二天下之樂一而樂者。予讀二此歌一而作者則必信二其人一也。

○記二正行母教訓詞一

頃ハ延元戊寅の春　福山城の戰ひよ運命つさなく官軍がかたさの爲ヨ打ち負けつはものどもの氣ヒ喪せて騒がしけりける有樣ヨ義貞心もとくて帝の下に使者をして

幹明曰前狼後虎事從難

又曰是所謂獻策帝閣不得達決志軍務豈生還者也

海南曰覺愁雲生紙

援の兵状乞ひければ帝楠正成を御側近く召させられ詔して義貞と智謀を協せて賊軍を滅すべしと諭せるヨ機略ヨ長き正成が事成らざるを豫て知り事の道理を言ひ陳べて暫しハ之をいなめども奸佞邪智ヨ隔てられ覺束なくも命を受け無て戰死を覺悟して櫻井驛ヨて正行に君よヲ賜ひし菊水の刀を與へ吳々も死しての後を依托して忠義の責ヨ泣き別き死すとも變ぬ丹心を誓ひ一者を七百騎と湊川邊ヨ打出でゝ雲霞の如き大軍と

幹明曰訣兒呼弟采戰此刀折矢盡臣事畢噫公一致命而天下之事去矣

命ち限りに斬まくり其勢ひの健げさは
一もて十に當るども彼は海陸二十萬
我は僅に七百騎いかでか彼れに勝たるべき
味方の勢も皆死して殘れる者は數十人
皆ゐ坐と列ねて死につけり春秋方さゐ四十三
敵尊氏が流石ゐも其の忠烈に感激し
せめくは死後の魂と平はせんと使者をして
首を河内に遣れるに正行是を見るよりも
悲憤の涙やる瀬おく妻戸の方ゐ行きければ
母怪みて側へより襖の隙を窺へば
父が兵庫ゐ向ふ時紀念ゐ留をし菊水の

梯村曰老龍既殪雛鳳又將老死哉

刀を右の手に持ちて自害せんとゐ構むたり
母此樣と見るよりも驚き起て走り寄を
其が小腕に取りつ紀て涙を流していへけるは
聞く梅檀は二葉よりいみじ紀香を放つとぞ
汝正行おさなくも父が子ならば不肖ゐも
是程の理に迷ふべ紀幼き身にもよく〳〵に
事の道理を思へ見よ父正成が軍さえて
攝津れ國ゐ向ふときに櫻井驛より皈せしは
死しての後に魂と平はをべき爲ならぞ
又汝ゐ刀もて腹掻切れとの爲ならぞ
不敏ながらも正成は君が爲には股肱なり

靖氏曰有此父母而有此子宜哉良蜚果不生惡齒也

海南曰慈母之心中其悲愴如何乎

正成死をと聞くおらば　逆賊四方ふ横行し
世ハ尊氏の世とならん　左ハ去りおがら一旦の
死ハ免れん其爲ま　多年の忠を失ひて
汚名を遺すこと勿き　一賊徒黨の一人も
生けてありなん其程ハ　金剛山ま引き籠り
忠義の旗と靡ゞへし　逆賊共を滅ぼして
厳慮を安め奉れと　言置れたる所なり
汝正行おさおくも　其一言をよふ聞て
我まも語り聞かせしま　いつしの忘れ給ふあや
斯くまハ君の御用ふハ　覺束おしとなく〳〵ま
其短刀を奪ひ取り　おわ免も角もなるおれば

生けて憂日を見せんより　先きふ我身を殺せやと
悶へ焦れく泣きけきば　正行大ま感悟して
自害の事ハ止ミゝると　實に何ハれなる有様おり
實まあハれおる有様なり

蜻民曰。讀二出師表一而。不レ泣者。其人必不忠。讀下祭二十二郎一文上而。不レ泣者。其人必不友。讀二此編一而不レ泣者。其人必不忠而耳。不孝而耳。無神經而耳。否則狂而耳矣。

○薩摩琵琶歌

忘れもせぬ十年の初めつ方妖雲西南の天に起りて
彈烟硝雨幾閲月終ふ城山一片の露と消へて其跡を

扨めし西郷隆盛翁の最後まに付勝海舟君まゝ此頃過ぎしこと共懐ひ出でゝまゝ左の琵琶乃歌を作りて坐ろまに英雄の末路と歎じ後無て薩摩琵琶に有名なる西孝吉氏へ此歌を贈られたりといふ

夫れ達人ゝ大觀を　拔山蓋世の勇あるも
榮枯ゝ夢歟幻歟　大隅山の狩倉ふ
真如の月の影清く　無念無想を觀ぜらん
何を怒るやいかり猪の　俄ふ劇をる數千騎
勇ミに勇むはやり雄の　騎虎の勢ひ一轍まに
留り難きぶ是非もふき　唯身一つを打ち捨てゝ
若殿原ふ報ひふん　明治十年の秋の末

靖氏曰英雅之行事雄快爽絶

諸手の軍打破れ　討つ打たれつ頭て散る
霜の紅葉の紅の　血汐まそめど顧みぬ
薩摩武雄のをたけびふ　打散る玉は板や打つ
霰の走る如くまて　面てを向む方ぞふき
木ざまに響くと死の声　百の雷ち一時に
落るが如き有様を　隆盛打見てほゝそゑミ
あふいさましの人々や　夷の年以来養ひし
腕の力も試めしみて　心に残る事もふし
いざ諸共まに塵の世を　脱れ出でんは此時と
唯一言をふごりみて　桐野村田を始めとし
宗族の輩ら諸共まに　烟と消えゝますら雄の

海南曰吾人不可無此氣力不可學此憑河

心の内こゝろ勇ましけれ　官軍此を望み見て
昨日は陸軍大將と　仰れ君の寵遇世の覺え
類ひなかりし英雄も　今日は何へおく岩崎の
山下露と消え果て、　移さば替はる世の中の
無常を深く感ずつゝ　無量の思ひ胸にみち
唯悄然と伍整ひ　目と目を見合す計りなり
折しもあれや吹きおろす　城山松の夕嵐
岩間ゆむすふ谷水の　非常の色も何とおく
悲鳴するかと聞さまを　戎服の袖を濡しそふらん

蜻民曰。維新革命之際。天下若無一先生。八十四州之風雲果依誰而收取。當此時予先生之恐不用兵也。而大業既成天下共臨治。當此時予先生之恐動兵也。功既成。名既遂。先生其將何有所望。而終如此。予惜不善其終也。

梯村曰覺殺氣滿紙妖氛撓筆端

○拜湊川楠公廟

公而不逝賊必滅　万古、韜略千秋、節
讀史大息南山、朝　滿腔、熱涙徒鴟咽」
今吾經過湊川、頭　落日秋風送漁舟
暮潮拍岸有餘感　低回想起往時、秋」
想見驕鯨翻波乳東海　不怪乾坤須史改
百二山河妖氛深　陰風獵々天日晦」

海南曰天下遂不可如何也

鋏兜曰戰場之狀寫來如油画

誰撑頽天一回百川衣冠叨恩二千年
獨此坐在南柯下錦帳春暖帝夢圓」
帝夢一覺鼙鼓起前狼後虎誰是否
不聽謀臣聽畫眉天乎至此只有死」
是時一死輕毫毛殺氣衝天万丈高
杜鵑啼血櫻井驛濛雲吞月鳴寶刀
七離七遭無勍敵裹創扶病衆奮擊
天地黯慘海嶽愁脫甲淋漓鮮血瀝」
叙到北闕星隕時禿兎豈忍著細辭
果哉朔風遂栗冽行宮夜雨更傷思」
誰道千古茫々興廢己宿奔何吊老賊鬼

海南曰結末以議論収拾意匠巧絶筆力万鈞

公法不磨此人心赫々功烈照青史
君不見終始難比江淮守城魂誰似當年五丈原
一代英風休謾説三世蓋忠有子孫
剛山巍々翠晩霧廊廟丹碧鬼神護
萬古大義日月明嗚呼忠臣楠子墓」
伊澤正路云。雄渾悲壯。命意用筆共到。可謂老手矣。余曾過此地。賦短古一篇。字句蕪雜。不能望斯詩之十一。今讀之不覺瞠後。

○桶峽懷古

復見強弩屈曾縞久聞章邯懸項老
快劍忽斷長蛇頭一敗不免持柄倒」

靖氏曰宛然身如經其境

又曰兵法云驕兵敗矣果然

陰雲低地冷腥風　驛馬晩過鳴海東
怒潮齧岸猶有怒　松楸如煙雨濛々
行人掩袂坐嘆昔　碧燐明滅飛的皪
駿州回首雲埋山　只見蘇苔剝蝕石
石上蘚色識千年　記否往時永禄天
三州兵勢捲風雨　百千旌旗竟無邊
將軍稱爵氣呑海　乃知亢龍遂有悔
脫甲取凉坐清蔭　大事卒去是誰罪
此時捷報頻交前　凉風吹顔催醉眠
短夢終了長夜夢　敵軍突入驚俄然
勝敗之數在機宇　可憐威武漫驕恣

幹明曰有声之画

還知釜魚化長鯨　果見窮雀噬猛鷙
三千鐵騎声和雷　一天暴雨山岳潰
劍乎電乎流光閃　英雄永休可悲哉
吁々積歳經營付兒戲　半途事業空夢寐
維此一驕百敗関　看取後来本能寺」
雖然興亡如梭己　茫々萬古遊魂迷北邙
駒隙匆々孰不老　蝸角是非雨相忘」
投筆拂袂顧一笑　凄凉只有草蟲吊
薄紗雲漏月色青　杜鵑無影声々叫」

梯村曰末尾結以凄寥之詞以存幾多感慨妙

伊澤正路評云。是篇比湊川詩。似輸一籌。然通體絶不見窘苦之跡。敬服。

海南曰順逆所存不可爭也以會兵之勇敢而遂不能抗禦焉然而會津公能得士心之深人人甘戰死而終不離心乳臭兒猶能如此況於非乳臭兒者乎噫

觀會津白虎隊自刃之圖有感

馬嶋杏雨

維時慶應戊辰年　八月念三風雨晨
鶴城東北竟難禦　苦戰不利石莚關
風沙曝骨幾千士　就中最憐白虎羣
決然直辭阿爺膝　恩愛無謝慈母前
齡未弱冠能奮戰　大厦一柱欲支難
童帥集童傳一語　彈丸硝藥瞥然殫
正氣應變策亦極　於是即欲屈吾君
敵軍早已絶前路　裂眦背無由到轅門
砲声轟天万雷震　猛火焰々漲黑雲

靖民曰皇天何不惜此金鉄丈夫而使就死邪

海南曰堂々議論行之以雄健之筆議論公大筆力縱横覺紙上錚々有聲

縱與君父不共死　馬革裹尸在此辰
十有五人無異辭　遥拜鶴城涙潸々
慙愧盥漱齊稽首　從容就死瀧澤山
我曽親覩今觀畫　感涙依旧灑衣巾
視死如歸又何壯　忠孝千秋髮指冠
有吾公而有此臣　有此父有此子孫
嗚呼乳臭之子猶存義　一死容易報國恩
堂々肉食大男子　何顔能見此忠臣

靖民曰。記實之詩。妙在寫其神。讀至瀧澤山頭就死之處。自覺愁雲生紙腥風猶迸。長歌之悲甚於痛哭。吾於此詩見此。

幹明曰千古確言

海南曰是馬伏波所謂大丈夫宜以馬革包屍安死子女之手之意也

○譯拔刀隊歌

我官軍兮彼賊軍　我王民兮彼逆臣
敵人縱令有智勇　智勇縱令欺鬼神
日月不照悖戾子　山川不載不忠士
古來賊子復何爲　行見肝腦歸泥裡
虎穴可驅馬可鞭　丈夫畢竟恥乏全
殺身成仁古所稱　抱関運甓幾何年
嗚呼鴻毛泰山同一死　何不奮起試一擊
江海之外天之涯　男兒須暴骨砂礫
腰間秋水三尺光　一條晴電誰能當

松井千行

又曰行文風生

又曰百忙中挿入戲言尤妙

蛟龍可斷馬可截　鐵騎金人恰羔羊
此器從來維新後　空在匣中甘陽九
今歲天地不棄吾　脫匣復接烈士手
尚方何要友朱雲　只須一閃拂妖氛
此地元來足擲死　人間何處不墓墳
嗚呼鴻毛泰山同一死　何不奮起試一擊
江海之外天之涯　男兒須暴骨砂礫
幾萬秋水射日光　凜々寒氣是滿場
劍林劍山亦不啻　身前身後盡鋒鋩
聞道劍山在他界　罪惡臣子之所居

又曰作者滿腔慷慨於此發露

吾黨何事登此山　豈有身行之可怪
但有國恩不可誣　生殺屠戮任彼徒
男兒決志入死地　劍林劍山亦坦途
嗚呼鴻毛泰山同一死　何不奮起試一擊
江海之外天之涯　男兒須暴骨砂礫
劍光閃々是驚電　砲声轟々是奔雷
腥風腥雨襲來處　天地爲動山爲摧
利鏃鋭鋒碎肝腦　迸丸飛石穿骨肉
伏體積築百丈山　流血滙爲千仞谷
男兒捨身是此際　誰奮心力報國恩

又曰爲天下除害是臣民盡國之本分也

彈丸矢石不足畏　但勿遊巡辱家門
嗚呼鴻毛泰山同一死　何不奮起試一擊
江海之外天之涯　男兒須暴骨砂礫
悲風慘憺草木膻　紛々狼烟漲中天
天崩地動江海沸　虎爭龍挐不雨全
好是男兒固決死　願將微軀供軍祀
勇士一臨矢石間　刀折力索可以已
唯爲王家討逆臣　何厭身骨碎爲塵
畢竟人間知恥士　豈可空爲素餐人
嗚呼鴻毛泰山同一死　何不奮起試一擊

江海之外天之涯　男兒須暴骨砂礫

人臣唯可致人臣　國民豈不爲國民

皇恩國澤不可負　誰爲社稷擲一身

縱令骨爲荒原土　名在汗青照千古

節義功名世所重　眇々微軀何足數

日本男兒執干戈　一死之外豈知他

懦夫之名不義稱　唯奈天下指笑何

嗚呼鴻毛泰山同一死　何不奮起試一擊

江海之外天之涯　男兒須暴骨砂礫

又曰我同胞三千余人富愛國蓋忠之心誠如作者所咏

龍谷曰。余亦曾譯之。而不能如此健筆。殆欲

焚稿。

吟風曰。一讀使怯夫勇。原作實妙。譯者之苦心。亦豈可沒哉。

漠然子曰。悲壯慷慨。豪横無前。其動人之處。不遜原作。

井上巽軒曰。慷慨悲壯。欲駕原作而上。何等之筆力。何等之才情。

譯波蘭土滅亡之歌　栗原亮一

弱肉強食一爭場　何異豺狼逐群羊

茫々天地公道滅　此時家國奈存亡

草莽豈無義烈士　奮然挺身執戈起

靖氏曰唯武是尚則好戰而失武愚唯文是尚則好華而失文弱

失武愚則國常亂失文弱則國常殪如波蘭土者亦文弱之餘弊遂致此乎世之憂國者宜讀此歌有以留心也

幹明曰慷慨悲憤筆墨淋漓

海南曰說得瞭々有繙歷史之想

激昂決死誓山川　國存則生亡則死
孤軍防戰爭雌雄　動如電雷疾如風
悲憤淋漓滿腔血　欲濺敵陣試擊攻
嘗膽曷時雪此恥　難奈士氣屬蓋靡
衆寡不敵勢既窮　奮戰決鬥斃而已
痛憤無告亡國民　號泣吞淚訴蒼旻
百万降兵夜流血　羶風腥雨泣鬼神
青燐連野堆髑髏　英魂毅魄地下哭
盡磨汝劍一斷汝旗　義軍一舉圖恢復
倫安多是自取殃　波蘭必竟非天亡

君不見蘇弗慮拂盡妖氛輝國光
又不見瑞底爾鮮血染出白山鄉

蜻民曰。亡國之狀寫來筆墨淋漓、吟誦一過猶有妖氛慘澹白日無光。天地爲之愁。草木亦哭。積骸累々覆野。流血溶々作河、彼李華所謂。目擊浩々乎平沙無限。覆不見人。河水縈帶群山糾紛。黯兮慘悴。風悲日曛。蓬斷草枯。鳥無声兮山寂々。夜正長兮風淅々。魂魄結兮天沈々。鬼神聚兮雲冪々。日光寒草短。月色苦霜白。傷心慘目之境之思殆使人不耐卒讀

○不夜城の詞

鳥が鳴てふ東路の　武藏の原の月影い

蜻氏曰前文讀盡而至此音調節奏霍然一變猶有層之歡又所謂馬頭初看米嚢花者也

草より出で、草ゐ入るそい古の名のみまて
今い變ゑて日の本の帝在ますを都ゐて
民の竈ゐたつけむりの簇がる雲ゐさえ似たゑ
往来の人の賤の女が取る梭よりも尚多し
斯る都の其ゃ北に在りと聞くなる不夜の城
鐵造りの大門ゐ車とゞろと輾らしつ
浮れて通ひくるゐゐる内の衢を六ゐ分け
中ゐる町い仲の町右と左の京町や
花の盛ゑの江戸町ゑ色い變らぬ呉竹も
後朝惜む憂節の節々繁き伏見町
君がくるまを待ゐ宵の月の光も角町や

鋏兇曰作不夜詞固如此筆不可不艶美

梯村曰余聞讀出師表而不泣者其人

四時折々の風景い盡きぬ五月の菖蒲草
名も面白き文月ゑ亡き玉菊の燈籠會
又菊月の秋の夜の眺もあかぬ月影ゑ
踊る俄の足並ゑ連れて心の狂ひ駒
繫ぐ緣の色え濃き彌生半ゐさくらむゐ
其の櫻ゐも彌増る物言ふ花ゐ照る月い
何時とてうくることゐさにやがて此の地を不夜城と
名々てこそい稱へけれ玉もて飾るたかどのゑ
滿る珍味は海山ゐ得難き物も多ならん
黄金鏤む盃ゐたゝへる酒に微醉て
鴛鴦の衾の中ゑ入り寢りもやらぬ枕邊ゐ

必不忠祭十二郎文而不泣者其人必不友而余未讀前二文而泣者焉然而至讀此編則余遂不得不垂涎也

薫る蘭麝の主やたれ　只燈火のゐの暗く
今將た消ん風情ある　富士の額まれく雪の
解て嬉しき睦言の　盡きぬ名殘を鷄ま
呼び醒さるゝ春の夢　今起き出る手弱女が
鬢の後れの黒髪を　のきあげつゝまゝ客人の
背ゐ打ちちくる重衣　重なる思ひまゝどい
口ゐいいで岩躑躅　只見のいせる顔と顔
紅葉を散ば木枯ま　早や時雨くる雙の袖
分て行くある客人が　後見ちへる青柳の
いと〳〵長き月と日に　變らぬ緑千代迄も
常盤ち知いの色増る　松の位の君許を

梯村曰不通花柳之情者

訪問ちちん不夜の城

蜻民曰。雖レ非下熟二知真境一者上。一誦猶能。知二此詩之流麗可レ愛。況於下眼則常目二擊此地之繁華一身常眠二翠帳紅帷之中一。能通二花柳之情一者上。一唱三嘆有二餘感一讀至二蘭麝薫處燈火影暗之一節。恍然使四人不三覺二垂涎之交レ頤

〇戯ゐ娼婦に寄を

月まむら雲花ま風　無常ち浮世の常かれど
いとも衰れと思ちるい　黄金の爲ま身を沈む
川竹の名ゐ悲しけれ　さいさり乍ら真心を
替らで立る操花　いつか香れる千世の史

一駁却之以爲濁流中決無此等之人焉雖然是大否矣如蜻民首藤若之嫗妓喜代治者實泥中之蓮雪中之梅矣

史ゐ殘きる人や誰　吉野の櫻花扇の
返しの歌の深　緑　白糸の隅田の煙ぞ衰れなる
貝原學士の小紫　髙尾ハ伊だゐ三つ股の
川の煙と名と流し　吉野の山の奥深く
入りまし人を慕ひやる　靜の心も可憐けり
化粧阪の少將や　大磯驛の虎御前
曽我兄弟が富士の裾　狩場ゐ果てし後の露
萌枯ハ同じと咏じける　妓王の歌を身ま滲みて
佛御前ハ尼とおり　西行法師も驚ける
江口の妙の歌心　親を思へる黛や
外國人ま肌そハぢと　喜遊の歌も感ぜへし

幹明曰所謂白蓮不滲汚泥者花柳叢中往々有此流之人

若も心ま真あらば　よしや泥水どろのおう
滲むれど清き蓮花　あだに此世を夢と見て
草木と共ま朽るかよ　萬世後の史までも
遺を名ところ望めぅし」

海南曰。文字優美。而趣意端正。誠非二徒作一也。余嚮得二此於芳原某樓一。一讀大美レ之而恐レ歸二其終烟滅一所二以是余纂輯一也。大方之姫媛亦常誦レ之。未四必レ爲三無二少補一。

○越路の白雪

山媛の霞長閑けき春日野の　柳の下ゐ結びたる
夢ま喜樂の花咲ぢし　昨日の天ゐ引ぅへて

靖氏曰亦是所謂故鄉有母秋風淚旅館無人夜雨情者雖其心即異矣其衰即一也

今日は墓なきうき雲や　水の流と人の身の
榮枯盛衰定めなき　浮世の憂ぞ知る身ぞい
別きて悲しき冬の夜は　衰れを告る雁の声
閨の隙洩る寒風は　散る木の葉さへ最ど尚
悲さ添ゆる終夜　過越し方を思ひかば
身は溪水の流おり　清むも濁るも戀と云ふ
底の心の迷ひから　悲喜衰歡の地に迷ふ
其れのあらぬのまつはらる　奇縁の糸の一縷ぞ
思ひ染たる戀人の　名も芳しき花の色
月の光はてる露の　墓おく消ゆる玉の緒も
戀ゆゑ縮む命毛の　筆は思ひと岩躑躅

幹明曰圓滑流暢如玉走盤上

花咲く頃は野も山も　笑ふ千艸の花は蝶
戯れ遊ぶ歡樂も　覺むれば秋の零しさぞ
浮沈の道を悟れども　覺めても迷ひ迷ふては
又迷ひ入る戀の闇　天を怨みぞ地を怨みず
人をも身をも恨みねど　思ひ出せは過ぎし日ぞ
別れをいとゞ鶯の　離れともおきむつごとの
夢おどろかを鐘の声　諸行無常の理りも
おゐ悲みを十寸鏡　曇りし胸の晴やらぬ
空凍寒きあさぢふの　小野の篠原忍ぶれと
あまりて人の戀しさは　のの在五の中將が
墨田河原は言問ひし　旅寢の憂を戀の憂

蜻民曰佳境退歩即是高人興味君何獨心不及此

海南曰婦人之識見皆至如此而後自由結婚初可施行矣

憂の數々なむる身の朋友に捨てられ同肥ふ
弄てられし身の今更ま戀しき君ま逢瀬さへ
嵐吹くてふ三室山ともみ浮名の立田川
顔に紅葉の時ふらぬ恥をさらばも己れから
犯せる業の淺間しさ悔むしい昨日今日のこと
意馬心猿の羈絆弦たち不去煩惱の犬を追ひ
一天四海ふ芳名を流さん心ち咲き初むる
寒紅梅の色も香も實も何る男兒が志
立て京都ま遊ぶ身の年を他鄉にふる鄉へ
錦を飾る返り花何時咲くことか白雪の
越路の空を望むのみ

蜻民曰。王弁州云。山棲是樂事。稍一營戀則亦市朝。書畫賞鑑是雅事。稍一貪痴則亦商賈。杯酒是樂事。稍一狥人則亦地獄。好客是豁達事。一爲俗子所撓則是苦海。或補一二云。紅粉翠黛是清事。一稍沈迷則畜生道。明珠寶玉是珍翫事。一稍執著則是仇讎。故佳境退歩即是高人興味。予謂。凡物得其中爲難。昔人有詩曰。二十四友金谷宴。千三百里錦帆遊。人間無此榮華樂。無此榮華無此愁。亦是此意也。

○戯ふ美人丹送る

幹明曰友人蜻民評先得余心余亦無所弄筆

勢田の長橋長き夜え身い唐崎の松ケ枝の夢驚ろかを小夜時雨しぼるや袖の下露ま濡て色ます増穂の薄穂丹出さねど心ふい何時のい君と石山の月せぬ契り千代八千代結ばんものと思へども堅田より落つ鴈の言傳寄る術もなしそもや御身い道の邊の引のば引け招ば靡け青柳の絲まいあらで霞引く高嶺の上の櫻花手折んことも中々に只お姿を見る計りあわれと推し玉くしげ解けて一夜のおなさけまやさしき言の葉賜いらば我が百年の命とも

梯村曰古人有詩云由君一夜憐誤妾百年身噫若何誦此詩以不自戒

をしくい比良ま思いねと

思ま暮の雪積り戀路も今いたへ果て、我身の上試三井寺や迚もこのないぬ戀なりと鐘てあきらめ居るもの、心の駒の狂ひ出に矢橋ま歸お帆なら祢ど行く身の末の末迄もとる手綱さへ今い早や止めかたなく進み行く君と近江の白真弓別かるゝ心ま羞かしの森の下露すりながし色も香もおき筆とりて拙おさふみの言の葉を綴る心をお推文字神かけ念ぐまいらする」

海南曰有色有香

蜻民曰。一片之情書。固非以有益乎世道人心者也。雖然。挿入近江八勝於行文中。左右

逢レ源。錦繡之才筆。又不レ易レ及レ也。

○賽二美人淚一

一夕與二柳溪情史一飲二湖心亭一談遇及二湖北妓流之事一情史曰才子爲レ才多病。美人爲レ美薄命。好事易レ魔情緣難レ全。真千古嘆矣。湖北某樓有二妓玉壽一風姿端麗。舉止嫺雅。曾贈二某氏一之書。文辭悽婉。不レ堪二卒讀一近日閱二某誌一有二美人淚一篇。係二清滬瀆逸名氏作一彼則疑眉男子作。是則釵裙女兒作。足三以誇二江湖之才人一乎。噫。鶯老有レ時。花殘有レ期。湖北繁盛亦不免レ煙滅一此地數百妓流懷二玉壽之感一者何限。乃

錄二其書一於左一。

東風ふ誘れ咲く花も　情嵐ふ吹かれてる
散落期もろさ春の日の　ちづ心なさ風をのみ
怨むぞ愚ろの風おくば　花ハ開のゞ落り、もせじ
實ゑや浮世ハ花と風　あだふ咲てハ仇ゑちり
落りて又咲く夢の世や　日ゑ流れ月ふゆく末定なき
身ハ浮萍の寄邊おく　今日ハ此方の岸ゑ咲き
明日ハ彼方の磯ゑ寄る　うきふしちげき川竹の
流を汲めばいとゞしく　儘ならぬ世と云ひながら
思ふゑ別れ思ハぬふ　逢へば生憎冬の夜の
長きを恨む終夜　東廠山の夜半の鐘

靖民曰是所謂耶蘇之愛敵心者乎呵々

海南曰空閨靜寂之狀宛然如覩

諸行無常と響くころ閨の灯火影暗く
過ぎこしのたの忍びきて思ひ出きゝ華のちる
浪花の里をあとゝして遠き東の征衣
露けき袂干す由もなく泣て明石の浦千鳥
友ゝなれて只一人うき年月をふる郷の
天なつゝしき秋の暮空飛ぶ雁の音信も
泣て嬉し夜はまれに笑ふてつらゝうき勤を
春秋三たびすぎ行て去年の彌生の花盛り
ゆゝしりの君ゝ逢ひ初めの色こゝひ〳〵の厚衾
余所へ洩らさぬ睦言の つくる期もなゝ暁ゝ
別れはいとゞ鴛鴦の離なれぬ中の戀衣

鋏兜曰垂涎三尺

着つゝ馴れ初し一年の歡樂去りて哀傷の
苦樂輪廻の習慣として浮世の義理の關の戸ゝ
隔てられてゝ逢ふ事も互ゝの情仇となり
今日ゝ悲しきうき空に降るゝ涙の雨か露
落ちて碎くる一雫硯ゝうけて水莖の
筆にゝ述べもつくされぬ懷を誰の不知火や
心筑紫の戀人と相見ることの夏来れば
あとゝ留めぬ花ならで散る枝待つ間の女郎花
何時此花の榮華見ん果敢なき者ゝ浮世のゝ

蜻氏曰。往年予嘗飲二柳橋柳光亭一。醉倒。衣闌夢覺。四顧靜寂。偶有二吟声一。隔二水相聞一。云。芙蓉

樓上相逢後。世事紛々離別久。未忘倚醉汚紅裙。五度春風花下酒。當時携手同游友。屈指如今多不有。樽前休唱舊秋思。滿月慘澹簾外柳。其音悽婉。起視之。婀娜少婦戲唱月下也。使人有尋陽江上之思。今讀此編不耐感舊之情。追想既往。憮然久之。終作詩謠曰。

瑤琴彈罷意纏綿。睛遍情恨知幾年。猶有風懷除未得。又拈綺語上華箋。

○待春詞

仙史は横灣の産なり前歳故あつて東都ゑ遷る然りと雖ども故里を思ふれ念未たやまぬ頃日新誌を閲

もるゑ紅髯樓在原の傳を揭ぐ仙史の横濱まあるや居八木下を去る甚だ遠からぬ仙史姉數名あり皆在原と友たり其時仙史尚少なり姉の在原と遊ぶの態髣髴眼前まあり今其傳を讀で懷舊の念まあ堪ぬ爲めまあ待春の詞を作りて在原ゑ送ると云ふ

浮世は廻る小車や　去年の彌生まあ花を愛で
手折し人も今はしも　人ゑ折らるゝ花となり
えの思ふ夜の春雨も　我が涙かと悲しまき
淋しき秋の夕暮は　芭蕉の露まあ袖ぬらを
いとも果敢なき女郎花　思ひやるだゑ哀れなり
さきど蓮は濁りたる　水まあ染ぬを人はめて

在此

君子ときへ稱へける　今いいやしき務めして
憂き川竹ゐ沈むとも　心の濁りあらざれば
いつしの晴るゝ秋の月　又冬の日の呉竹乃
枝撓ませてつむ雪も　いつしゝ解て此乃花や
今を春邊と目出度も　浪花ゝあらぬ東路ゝ
匂ゆかしく咲出む」

海南曰。離陰雲去之月却明。耐風雨來之花益美。世之讀此編者。堅忍不拔能耐艱難。單非東路終欲使香氣馥郁一大美花開於我東洋也。

○初冬山居卧病

梯村曰山間靜寥之狀歷々在眼

蜻氏曰山間之實況

四時の中ゝく冬の日ゝ　衰れ弐添ゆるえのぞかし
ましゝ山家の痩せ住ひ　衣引き被けて病の床
訪ふものゝ颯々と　木梢ゝ應ふ松の風
孤客の腸を斷つとさへ　言ゝる〻猴の谷間ゐて
友を呼ばんと鳴き叫ぶ　聲さへいとゞ霜枯きて
聞くゝ得堪えぬ愁憂む　又四邊なる竹叢の
中ゐ栖をくむ梟の　我身の影を月の火ゝ
微し眺めて樵夫等の　あだをば爲し丹來つらんと
叫ぶ一音ゝ之れぞこれ　寒さを增をの原とゞなる
又彼所なる井戸の邊ゝ　氷を結ぶ響音も
共丹空をば北ゝ指し　並び飛なる旅雁の

幹明曰山居臥病無此結末則平板不可誦有此一結而全編活動

叫ぶ聲音は又ぞ是れ　斷へし故郷の音信を
おげく原とぞなりにけり　嗚呼山中は物さぶし
嗚呼病める身はいとを苦し　誰が我廬を訪ふて
我苦を半む分たんものと　叫びもたへる折からあ
柴の折戸は西東　颯と音して開きしは
狐狸の惡戯ぞ嗚呼苦し

蜻民曰。今聖天子在レ上。賢相列レ朝。開二四門一達二
四聰一。能者必被レ用才者必被レ舉殆如三野無二遺
賢一。然而天下之廣未レ能三盡舉二其才一。學問文章。
如二先生一者。而猶落二魄於陋巷一。而不レ用如レ此乎
噫。

鋏兜曰質朴可愛

○耶蘇辨惑一節　外山正一

左の演説は亞米利加の土人レツト、シヤケトが宣教師クラムプ氏に向てなしたる所のものなり

我が兄弟よ主は今此處を去られん其前あ
我が返答を聞きさしと實に尤のことぞうし
主は遥る〳〵遠國に來れる者のことおれむ
余はいたづらふ主の足止むるおとは試ば願はぬぞ
さはさりながら余はこゝに往事に少しさうろぼり
余が祖先より聞知及ぶ事と余輩あ白人の
語る所を聞をべし我が兄弟よ聞ねのし
主は知らぎや其昔此大國を我が祖先

海南曰一幅大古之寫真

所有なしたる時ハあり處ハ廣く日の出より日の入までも亘りたりまこのち給ひて水牛や鹿や其他の動物と食物として與へたり其よそふべき衣服ハハ海狸やら熊の皮此等のものをかく廣き國ふあたまま獲る手段人ま教へハ〜給へり王蜀黍ハ地ま生しパンに作れと與へたを〇〇る恵を大神ま受けたるまけハ赤人と愛せられたる故ならんもし我が中に時として狩場の事で爭論の起ることゞもありとても血を見て事ハ治まりきさるに其後惡日の

又曰狡獪可惡巧言可恐

我等が上まめぐり来く主等の祖先大洋をその數ハじ免多らぢ渡りて此地に来りけりぢ恵ミハをきど仇おさぢ此地の者ハ其人を〇〇も本國を去りたるハ其人たちのいへる樣たるく此處ま来れるハ國に惡人多き故己等がまもる宗門を信仰おさん爲なりと因てをこしの地を乞へり此地の者えあたきみて其願望をかなへさり即ち彼等こゝ丹住み我等ハ彼ま與ふるまコーンと肉を以てせり彼等ハ之ま酬ゆるま却て毒を以くせり白人こゝ丹新國を見出したれば其由を

梯村曰報德以怨

幹明曰得隴亦望蜀

國ゑ歸りてつげしかば　まを〳〵来る者あるも
我等ハ彼を友人と　思ひし故ゑおづかしみ
恐る、ことハあらざりき　我等を呼びて彼さちハ
兄弟なりといひければ　我等ハまことゑ彼達が
かく思へりと心得て　廣充土地をば與へたり
遂ゑ彼の輩殊の外　増せるが故ふなほ廣充
我が全國を望みたり　我が目もこゝゑ醒たきば
胸の思ハ安からぎ　遂ふ戰爭と相成りて
狡猾極ハむる我が敵ハ　同じ人種の赤人と
雇ひてこきを赤人と　戰ハしめしことたえぎ
また最と辛き慘毒の　酒を此地ゑ持參して

又曰呑噬無不至惡而猶有餘

數千人を殺しさりぎり　我が兄弟よ其昔ハ
余輩の所有廣くして　主等の住所狹かり充
さきども今ハ事變り　ぬし等ハゆとも強盛の
民とハ成りて自分等も　蒲團一枚廣〳〵と
布く地も持たぬ仕儀となり　既ゑ主等ハ我が國を
奪ふといへどゝくておほ　あ充たらぎして無理おしふ
我が宗旨をば變へんとき　我が兄弟よ聞ねかし
ぬし等云ハずや余輩の　はる〳〵此處ゑ来りしハ
大神の意に叶ふ様　これを仰がん其仕方
人ゐ知らする爲おそと　してもし余等白人の
教ふる宗旨信ぜぎば　未来に於て惱まんと

海南曰議論堂々如武侯之行兵

主い正しく余ゑ邪おり余等い天ゐ昇られぞ
抔と主らい云ゑるれど ぬーらい之と如何ゐして
真ゑ然りと知らる、や 主の宗旨い書ゑ載れり
もし大神ゞ此宗を 主等ばかりの爲おらで
余輩の爲ゑ圖りたる ものおゐならば何故ゑ
おれを余輩ゑ與へざる それのみならぞ何おれば
此書あ解す智と共ゐ 此書のありと云ふことを
我が祖先にい知らせぬぞ 余輩いひとゑ主等より
聞くことのゑを知れるおり ゑてぬしさちの云ふとい
何を信ぐてよかるやら 余輩い既ゐ白人ゑ
欺かれーい幾度ぞ 我が兄弟よ主たちい

梯村曰論采適切痛快

大神仰ぐ其道い 一ットつゑ歸をと云いるれど
もし宗門い唯一ッゑ 歸をるわ々にをあるおらば
なぜ白人の内とても 宗派ゑっゝる異同ある
主等い共ゑ此書をば 讀を得るなるゐ何故ゐ
かく折合の惡さぞや 我が兄弟よ我々い
此等の事い解せぬぞ 主の宗旨い天父より
主の祖先ゐ賜りて 親より子ゑと傳いれる
ことを主ゑい云はるれど 余等の宗旨も天父より
余等の祖先ゐ賜りて 遂ゑ余輩ゐは傳れり
余輩い右のならひにく 天の神をば仰ぐなり
るれ我が教い天恩を 從此ともゑ有難く

鍼斌曰滿腹誠實慈愛而作此靄然言語

思へと教へ聞かせなり並に教へ云へる様
互に愛し和をへしとされば余輩ハ宗教の
事に就てハ爭たゞ我が兄弟よ人類ハ
みな諸共に大神のつくりなしたるものなれど
其白人と赤人と全く別に造られて
面の色より風俗も一ツも違たぬものハなし
神ハ主等に藝術を與へらるれど是等ハ
余輩の目をば明けられてされど余輩の藝術ハ
善き事なるを知れるなりうき他の事ハ皆をべて
うゝる違のあるのらハ宗旨も余輩の智慧だけの
ものをもきらに與へつと信じてこそハまもりけき

幹明曰名言名論

靖氏曰當然之論也

又曰雖不當不遠

神ハ正しきものをるぶ其子の爲に何事が
最も善きう知るならん余輩ハ此に滿足を
我が兄弟よ自分等ハ主の宗旨を亡ぼさん
ことも願たゞ主達の之を棄つるも願ハねと
余輩ハ人の宗旨より自分の宗旨信ぜたし
我が兄弟よ主達のこゝに来きる其主意ハ
余輩の國や金銀と取らん爲にハあらずしく
ゐれ等の心開うんが爲のみなりと云たるれど
我もしば〳〵主達の宗旨の會に臨みしが
金を集しことと知るして其ハ何故ぞ
集をらきしう知らねども蓋し僧侶の爲ならん

われ等も主の宗教を信ぜん時は余輩より金をとらるゝことならん主はこのごろ此地ふて耶蘇の教を白人よ説のきさりとは聞つるが あるきの近隣の人なれば余は此輩を親く知きり されば暫く相待ちく其説教が此輩に如何ある驗のありたるゝ篤と見居々申すべし もし此輩と改良し正直よなし赤人と欺くことを止めしめば其時こそは我々も主の云はれしこと共を又考ふることならん 右は則ち我が答云ふべきことは別ふなし お別れ申をことふれば まさふ貴君の手を握る

梯村曰言々不逼

別を告んものふこころ主等の歸路を大神は まもり給ひて安全よ主等の友ふ會はしめん ことを余輩は冀望なり此言聞きて宣教師 會釋もおしふ席を立ち神の宗旨と惡魔名の 業とす好あるぞよと云ひて手を握ることさへも 辭める故ふ赤人は皆うち笑みて立去れり」

海南曰。余嘗。與靖民小史首藤子訪英國宣教師。伊北氏。於築地。氏蓋。小史之嚮執贄而從遊者也。氏曰。吾一從入貴國。茫茫然茲二十年。用力布教可言勉矣。然而經營之效未著。有何害物。而擴布我教於貴國之難如此耶。

鋏兜曰慈愛之情無不至

小史曰。先生未知之乎。夫我國西教之先入。實爲天主教。而彼所謂天主教者。其趣意目的陰險可惡。先生之所知如彼此以。我國人深惡西教。嚴拒堅絶。殆茲二百年矣。及維新革命政体一變。廣與万國相交通。西教再入我國焉。如先生者蓋其一人已。是故今西教亦非古西教也。雖然。先入爲主者。容易不可動。聞其同西教。惡之如蛇蝎。是雖非先生之經營不至。所以未見其效也。氏曰。甚矣哉。天主教之害。一至此乎。談論至夜半而別。回想實在三年之後矣。今讀此編而考米國土人。

蜻氏曰予嘗送某生詩云從是小書樓上月與誰同

答宣教師某氏之意。是亦小史所謂。爲先入主所制者乎。

○贈學友

雪くもりをる冬の日は　野山の木々も何となく
哀ゝをそゆる物そかし　況しておん身は故郷と
離れて遠く客の天　霜のあさゝや雪の夕
月影白く風清く　愁の窓をさしのぞき
そゝろゝ起すさと心　忍へぬ折もありつらん
左は去りなら妾身は　思へを更ゆ萬々倍
去りつる明治十五年　辛巳の春の一月ゝ
友なり師なるおん前か　かしまたちをる其砌

讀與誰看拙劣尤甚矣今以此文相對觀固不可同年而語也雖然其意別一矣

海南曰文雖拙出於誠者必可誦焉況於此妙絶文乎

妾か心如何おらん　五年六年其間
同し學ひれ窓の内ゐ　互ゐ勵ミ勵ましつ
問ひつ問をミつ相勉め　出てゝ野山ミ徜徉し
居てを道義を相語らへ　水魚と契きる交りも
學ひの道を修めんと　妻諸共ふうち捨てゝ
遠き旅路ミ出て立つと　聞知ける時の妾か胸
口惜しくも余りあり　おん身ゝ兎もあれ角もあれ
妾ゝ此後誰ミ依り　學ひの道や裁縫と
誰に相問へ相學ひ　其疑ひを晴さんや
倩思ひめくらせゝ　生きて居おんもあしけおし
よし妾身もこミよりゝ　おん身の後ミ從ふて

梯村曰往年余於某生也又嘗有此感矣

行かんとすれゝ如何んせん　學ひ拙なく家貧ゐ
しかのみおらす妾身ゝ　兄弟無き身ミ何ミぬミゝ
偖ゝ行末覺束おし　況してや父母ゝ老てゝミ
せんすへなくも泣々ミ　こゐるゝ涙おしかくし
坐ゐらおん身ミ別れたり　一度別れし其後ゝ
樂しき事の絶てなく　日々の食さへ甘からを
夜毎の夢も結ゐれす　人の言さへものうくて
日夜おん身の事のミを　心ミおもへ鬱々と
病も出なんかりさまミ　父母さへ痛たく苦しミて
種々ミ慰さめ給ふそ　漸く心取直し
我と我身を顧みて　嗚呼過てり過てり

蜻氏曰讀至此不覺汗背

御身と一旦相別き縱令千里を距つとも
四海に同じ我姉妹暫しの別れに悲しくも
又逢ふ事の由あらん賤しき小人子女丹似孫
鴛鴦麋鹿の比ならへ終身一途ふ群れ集へ
心よしとやなをへけん丈夫といたれん人々に
僅かのなけき丹打ふして己のか心を挫かんや
よし妾身もこれよりに日夜裁縫學問を
夏の螢や雪の窓雨ふ沐し風ふ櫛り
切磋黽勉琢磨して他日師範の業を卒へ
目出度おん身の皈る日を樂んてこそ待ち居んと
考へあいる暇もなく月日の流れ早くして

海南曰奬勵之言懇篤親切

蜻氏曰金言々々予甞駁兵制擴張論者曰兵備末也文學本也不培本而欲其末之繁茂難矣無供給兵備之資本而兵備寧全哉銃劍彈藥軍艦糧食等

一年二年疾く過さて
明年つる春に三年なり
おん身の職に何なるぞ
他日黽勉業を卒へ
まに訓導の職とおり
民の智識を開くなり
見給ふ處ありぬかし
其本立て國榮ふ
見よや歐米各國の
世界の内ふ比ひなく
人智を開くの外そなき

また昨日れ心地たよ
おん身よおん身勉めよや
方さ丹師範の身よありて
學ひの舍を立ち去きに
小學子弟を教育し
おん身よ爰よ注意して
民に國家の大本おり
本立たされに末立さす
兵強く國富みて
榮かふるも其源に
さをれにお身ら其職に

由何而仕給外則貿易内則農商工藝是勤以給此資焉而論所以使給此資之本則文學爲是母胎矣以與此文可參觀

國れ盛衰にかゝるなり　おん身ハ實ヲ重職ヲ
勉めよ勉めよ怠たるな　不敏なのゝも妾身も
今より勉め勵みつゝ　他日おん身か錦着て
歸る日を待ち侍るなり　おん身夫れ是を黽めよや
おん身夫れ是を勉めよや

蜻氏曰。衰別離苦之情。述得懇到。亦使吾人。回想疇昔與親戚故舊別。負笈而去故山之時殆有不耐感旧之情者焉。雖然衰而能不失傷。中段以下專用勸奬奮勵之言。以強人意。終歸着不衰。今日離別而寧樂他日再會之一言。以作結。其意匠之超越。文字之精練。殆使人欲燒其筆硯。

篆評

新體詩選　尾

跋

東台櫻花。所人艶賞也。而予所最愛者。有六焉。其一。在若曉烟初破晨霞影紅。微露洗花風姿潚灑。美人初起嬌怯新粧。其二。在若明月浮花影篭香露。色態嫣然夜容芳潤。美人步月丰致幽閒。其三。在若夕陽在山影紅花鮮。酣春力倦嫵媚不勝。美人微醉風度羞澁。其四。在若細雨濕花紛容紅膩。鮮潔華滋風姿優美。美人浴罷煖艷融和。其五。在若高燒庭燎把酒看花。辯影紅稍爭妍卉色。美人曉粧容冶波俏。其六。在若花事將闌殘紅零落。辭條未脫半落半留。每輕風動万点殘紅。撲面撩人。浮樽沾席。意況蕭騷。美人病怯鉛華銷減嗚呼。予花候常弄此六趣。席地醉飽。高吟詠懷。使花片歷亂滿衣。殘香隱々撲鼻。幽觀流暢此樂誠不窮焉。雖然寒往暑

來寒暑相推以相爲四時是故花候獨不能長久而花候中亦有風雨之憂焉。然則長久之快樂者。不可終希望乎。以秦皇漢武之勢。而終不能滿其欲。其果不可終希望也。頃者友人海南仙史。袖一書來曰。余嚮編新体詩歌者。累至第五集。子嘗所知。至今深悔其粗笨。思所以訂正之。有日焉。而適會書肆飛書來。見求又別新体詩之編纂。則亦有此編。子請爲余跋焉。乃披而讀之。有情有韻。至如其觀美。啻櫻花六趣哉。朝夕展觀得以相樂矣。予多年所以苦獲之々術者仙史一朝而得之。收拾之一小冊子。使讀者長。得三春觀花之樂。何其敏也。愛讀之餘陳一言。以殿卷尾。

明治十九年八月上澣　　蜻民陳人　首藤次郎選

明治十九年八月十六日板權免許
同　年九月　著者兼出版人　廣嶋清治郎
纂輯人　竹内隆信　和歌山縣平民
芝區西久保明舟町八番地
加藤汲吉方寄留
出版人　和田篤太郎　岐阜縣平民
日本橋區通四丁目五番地

秋田市

廣嶋清治郎有